



## 馬耳東風

共通一次テストが終了した翌朝の朝刊で、私は初めて知った。

大学入学共通テストにおいて、「情報Ⅰ」が昨年からすでに試験科目として採用されていたという事実である。正直なところ、全く予想だにしない紙面に私は心の底から驚いた。慌てて実際の試験問題とその回答に目を通し、「なるほど、こういうことか」と腑に落ちる一方で、これを今まで知らなかったのは、どうか私一人ではないことを期待したいが、会員諸兄はどうだろう。そして同時に、これは単なる入試制度の変更ではなく、日本社会が静かに、しかし確実に舵を切った瞬間だとも感じた。

高校教科としての「情報」は2003年に必修化されたが、長らく大学入試とは距離を置かれ、「受験に関係ない科目」として扱われてきた歴史がある。ところが2022年度の学習指導要領改訂で「情報Ⅰ」は大きく姿を変え、プログラミング、データ活用、アルゴリズム、情報セキュリティを含む内容へと再設計された。そして昨年度から、共通テストという全国規模の評価の場に正式に組み込まれた。

では、この「情報Ⅰ」は何を測ろうとしているのか。試験問題と解答を眺めてまず感じたのは、プログラマーを養成する意図がほとんど見られないという点だ。つまりコードを書かせるのではなく、長い問題文や図表、擬似コードを読み解き、条件を整理し、処理の流れや考え方として妥当な選択肢を選ばせる構成になっている。そこでは暗記力よりも、情報を構造的に理解し、論理的に判断する力が問われていた。

この設計思想の背景の一つには、AIが前提となる社会の到来がある。AIは理系技術の結晶である一方、実社会で使われるAIは文系的思考なしには成立しない。どの情報を使い、どこまでを機械に任せ、結果をどう解釈し、最終判断を誰が下すのか。そこには倫理、社会性、そして説明責任が必ず伴う。「AIは文系か理系か」という問い自体が、すでに意味を失いつつある。

世界に目を向ければ、日本の動きは決して早くない。個人的にはもはや周回遅れの感すらある。欧米では計算論的思考や情報リテラシーが初等教育から組み込まれ、韓国やシンガポール、中国でも情報教育は国家戦略として進められてきた。共通テストへの「情報」の導入は、日本がようやく世界標準に追いつこうとした一歩と見るべきだろう。

この変化は、臨床の現場にも確実に影響を及ぼす。診断支援AI、画像解析、電子カルテ、疫学データ、予防医療。現代の獣医療は情報と切り離して語れない。情報を読めない専門職は、説明できない専門職になる。逆に言えば、「情報Ⅰ」はAI時代に「説明責任を果たせる専門家」への入口なのである。AIの結果をそのまま伝えるだけでは専門家とは言えない。その意味と限界を理解し、飼い主に説明し、最終判断を引き受ける存在であり続けること、それこそが専門職の価値となってゆく。

共通一次テスト「情報Ⅰ」は、受験生だけの話ではない。これは、私たち専門職一人ひとりに向けられた問いでもある。AIをどう使うのかではない。AIの時代に、人は何を引き受けるのか。その問いから、もう目を逸らすことはできない。

(も)